

# まんだら通信

第183号 (通巻214号)

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org

平成23年(2011)09月 佛誕2577年 皇紀2671年

## お年寄りの出番です

インドの首都デリーの北の方、ビハール州のラジギルから、歩いて一時間ほどのところに霊鷲山という岩山があります。お釈迦さまがこの国においでになるときは、いつもここに滞在されました。麓からだと三十分ぐらい、緩やかな石段が続きます。以前は「ブッダの説法を聞くときは、王もここから先は歩いて登ったのである」と書いた立て札が途中にありました。

最近左の写真のように、綺麗な石段になって味気なくなりました。日本の援助で改修したのだそうで、余計なことをしてくれたと、残念でなりません。

さて、マガダ国のアジャータシャトル王は、力をつけてきたヴリッジ族の勢いが強くなることを怖れて、ヴリッジ族を攻めようと思つていました。そこでお釈迦さまがこの霊鷲山にご滞在の時、その



ご意見を聞きたいと思ひ大臣を遣わしました。王様の伝言を静かに聞いていたお釈迦さまは直接答えるのでなく、後ろから扇で煽いでいる侍者のアーナンダ尊者にお訊ねになりました。「アーナンダよ。ヴリッジの人たちはいつも会合しているというのを聞いているかね」アーナンダ尊者が「はい。そのように聞いております」と答えると「アーナンダよ。ヴリッジの人たちが良く会合し、腹藏のない話し合いを忘れない間は、彼らは栄えることはあつても衰えることは決してないであろう」とおっしゃいました。

実はこれは「七不哀法」といって、家族や民族、国が栄え続けて衰えないための七つの心得で、以前お釈迦さまがヴリッジの人たちにお説きになった事柄だったのです。

二五〇〇年前のインドと現在の日本では、七つの項目総てが必ずしも同じというわけには行きませんが、当てはまると思うことをいくつか挙げてみましょう。

第二 ヴリッジの人たちは一致和合して会合し、決議し、事を処理しているか。

第三 彼らは前の決まり事を捨てることなく、昔からの風習を守つて

第四 彼らは年長者を尊敬し、その言うことを聞くか。

第六 彼らは色々の宗教の社やお堂を尊敬し、しきたりの供物を怠ら

第七 彼らは宗教家を尊敬し、よそから喜んで宗教家がそこを訪れ、そこに在る宗教家は喜んでそこに留まつているか。

どうでしょうか、一例を挙げます。さすがお釈迦さま、何事によらず王様が上から命令を下していた時代の二五〇〇年前に、既に第二の項目のとおり、民主主義の方法が一番宜しいとおっしゃっているのです。

但し、忘れてはいけないのはお釈迦さまの「民主主義」は、今の日本で流行っている民主主義ではないということです。お釈迦さまの「民主主義」は、自分のことだけではなく、みんなも一緒に栄える方法であつて、今の日本では我が俣の言い放題、自分がよければ後は知らない、といつていいことですね。

大ざっぱな言い方ですが、農家が赤字を出したら政府がお金をくれましょう。子育てには、大金持ち貧乏人の区別なく手当てを出します。

このように言っている政府が出すお金は、全部我々の税金ですね。「後期高齢者」の私でさえ、毎年二百万円以上の税金を払っています。

つまり、補助金とか手当などと言つても、他人様のお金を貰うということでは乞食と同じです。

こういうことは、足りない給料で毎日やりくりしている若い人々には、その通りだと思つていても、なかなか言えないことです。

そこで四番目が大事なんです。お年寄りは、悠々自適とまでは行かなくても、お金もうけの修羅場から離れることで、世の中の本当とウソがよく見える境遇にいます。

家族の中でも会合でも「あなたの言っていることは、ここがところが自分勝手だから、そこん所をちつと引込めると、みんなが丸く収まるんだけど」といえる立場なんです。

年取れば、家の中でつまずいたり、体はだんだん言うことを利かなくなり、体はけれども「お口」はまだまだ達者だったから、どんなことを言えれば嫌われる、などと「いい子」をやっていると、孫子の代にはもつと住みにくい日本になるような気がしてならないのです。

そうは言うものの、「頑固ジジイ」や「意地悪ばあさん」は逆効果です。年の功ですから、おだてたり褒めたりすることも忘れないことですね。

## 余滴

◆毎月思うことですが、1ヶ月はあつという間です。涼しい日があると思うと、暑さがぶり返して体重がまた減って、遂に42キロになりました。「天高く馬肥ゆる」季節が早く来ないと、本当にミイラになりそうです。◆毎年恒例になった深津純子さんの『ふれあいコンサート』9月25日(日曜日)午後5時から。前売り2,500円です。その頃になれば「暑さ寒さも」のお彼岸も終わり近く、凌ぎよい初秋の夕方のフルートとギター演奏会は、心穏やかになる妙薬です。本堂での西洋音楽もいいものです。お誘いあって是非おいで下さい。

◆今年は6年に一度の『たのくる巡礼』です。期間は10月1日から15日までの半月間と決まりました。各札所の世話人さんは、庭に立てるお塔婆や道案内ののぼりなど準備をお願いします。また、お接待の順番などもお願いいたします。◆24日の1時半からは、これも例年通りのお施餓鬼です。紫雲寺・長福寺・観乗院・石戸寺一緒に行きますが、紫雲寺以外のお寺のお檀家も世話人さん任せでなく、お参りされるとご先祖がきつと喜んでくれます。また、遠くにおられる人は電話

でお申し込み下されば、お塔婆を墓地に供えに行きます。ご存知の方は毎年そうしていますので、どうぞお気軽にご連絡下さい。◆センニンソウ【キンポウゲ科センニンソウ属】。お盆過ぎ、まだかなと思ひながら車を走らせていると、ある日突然道端に一齐に群がり咲き始めます。花の大きさは3センチほどで象牙色。顔を近づけるとほのかな香りがあります。テッセンやクレマチス、カザグルマの仲間です。この花が咲くと、秋が近くなったという気持ちになります。2011/09/09 龍渉



# にっぽん人情小囃

三遊亭鳳豊

## 第六十八話 一流の学生

最近の小学生は、大変に賢いらしいですね。ある先生が驚いておられました。授業中に漫画を読んでいる生徒に、女性の担任が「大毅君、先生が教室にいる時には、漫画を読んじやいけないって、昨日も言ったでしょ。なぜ、やめないの！」と怒ったら、大毅君、何げなくこう言ったそうですね。

「一定のメドがついたら」  
首相が辞めないとい、子供たちもやめないように。

先日、千葉県柏市にある麗澤大学に行ってきました。この『MOKU』に執筆されている松本健一教授が教えていらつしやる大学ですが、いまだき珍しい学生数の少ない大学で、キャンパスも美しく、外国のカレッジのような素敵な環境の大学でした。

実は、そこで、とてもユニークな授業が行われると聞いたので、「偽学生」になってノコノコ出かけていったのです。

その授業は、同大学の井出元さんという中国文学の教授と真殿達さんという国際経済学の教授の対談形式で、司会は同大学キャリアセンターの石光俊明氏で行われました。これは、どうも、真殿先生の授業のひとつで、一回一回テーマを決めて、「学生とは何か」について、学生たちに聞いてもらおうと、国際経済学の授業とは別に、週一回行われているようでした。

私が知り合ったのは、真殿先生が先でした。真殿先生の名刺をもらって「真殿達」の「達」の名前が読めなかったの、「これ、なんとお読みするんですか？」と尋ねると、「さとり、です」と言うので、

思わず「自転車の？」と聞いたのがきっかけで、落語の好きな真殿先生と打ち解けたのです。もともと、真殿先生は私の師匠の鳳楽師の大変なファンだそうで、どんだん仲よくなりました。

井出先生とは、真殿先生の紹介で飲みました。この先生は私が言うのもなんですが、まさに博覧強記、なんでも知っています。はつきり言って、私が知っている大学教授のなかで、一番か二番ですね。もともと、こんな私ですからね、大学の先生とお会いする機会はありませんけど。

しかし、井出先生、何でも知っているからって、決して、軟弱ではありませんよ。ガリ勉どころか、高校時代は柔道部の主将で、硬派ですから、体格も立派、明治時代の大学教授のようでした。

ですから、この先生、学生に自分のことを「先生」と呼ばせません。軽く「井出先生」と言おうものなら、「私は君をまだ教え子とは認めていない。だから、私は君の先生ではない。したがって、君が私を呼ぶなら『井出さん』と言いなさい」と叱られます。

ねえ、カッコいいでしょ。  
前置きが長くなりました。お二人の対談「学生とは何か」。おもしろかったですねえ。

ある時、授業にまったく出て来ない二人の学生がいました。井出先生、気になったので彼らを探すと、大学の駐車場にいつもいるというのです。行ってみると、ふたりはクラシック・カーのメンテナンスを必死でやっていました。

「なんで、授業に出てこないんだ」と言うと、二人の学生は声をそろえてこう言っただけです。「はつきり言って、いま、こつちのほうに授業より大切なんです」。聞けば、彼らは夏休みにアメリカ大陸を東から西へ、また西から東へクラシック

ク・カーで往復する計画を立てていて、いま、必死でその準備にとりかかっているとのこと。

車の準備、英会話、アメリカの道路交通法の勉強、資金の心配……。たしかにやること一杯だ。結局、彼らは授業を放っておいても、見事、自分たちの冒険を成功させ、就職も一流メーカーにすんなり入ったといっています。

「旅行は、総合科目。大学の授業よりよほど勉強になる」と、井出先生。

一方の真殿先生の話はこうです。

ある先生を殴って退学になった学生が、なぜか、真殿先生のゼミの合宿に現れた。その年、偶然にも、真殿先生のところにある企業が「先生の推薦があれば、ひとり採用してもいいですよ」という申し出が来ていました。先生は彼に言いました。「お前、彼女がいるんだろ。結婚するんだろ。大学には戻れないんだ。だったら、きちんと働けよ。いい会社だから、俺が推薦するから。向こうも、中退でもいい、先生のゼミの学生ならと言っているんだ」。

ところが、彼は断った。「俺、自分の力で生きていくから。何としても、彼女、食わせるから。絶対、ひもじい思い、させねえから」。そして、彼は壁塗りの左官をやりながら、必死で働いていました。真殿先生は、そんな彼をずっと見ていたそうです。

まだ三月、いまならギリギリ間に合うと思っただけで、彼を誘って酒を飲みました。

「おい、四月からあの会社で働いてくれるんだろ？」

「え、先生、あの話、まだ、断っていないんですけどか」

「おお、事情をきちんと話したら、入社してくれるまで待ちますよって話だ。お前のことを待ってるんだよ、あつちは」。

期待してるんだよ、お前の力を」

「先生、ありがたえ……」

こうして入社した彼は、一生懸命その会社で働いたそうです。そのおかげで、この企業は毎年ひとりずつ、この大学から就職希望者を採用してくれていると言っています。

それから一年後のある日の夜中、その彼から電話があつたそうです。

「先生、夜分にすみません。いま、彼女と入籍しました！ なにがあつても先生に一番最初に報告したくて……」

「その夜の酒のうまかったこと」と、真殿先生。

「一流の大学というのは現実にある。しかし、そこに一流の学生がいるとはかぎらない」

最後に井出先生がまとめてくれました。

著者、三遊亭鳳豊師匠とMOKU出版さんの太っ腹のご好意で、9月号からの転載です。

A4判一五〇ページほどで、総てコート紙という豪華な体裁です。一部一八〇〇円と、ちょっとお高いのですが、選りすぐった寄稿者と、記事の内容にいふし銀のような重みがあつて、「心のお薬」には最高の雑誌だと思っております。

定期購読しているのは正論、Wii、ボイス、大法輪、MacFan、寺門興隆など、それぞれ特色のある雑誌ばかりですが、その中でも配達を楽しみに待っている一冊です。